

学士課程 4 年生における看護技術演習・シミュレーション学習の評価

毛利貴子、光木幸子、笹川寿美、滝下幸栄、山本容子、山縣恵美、高尾憲司、倉ヶ市絵美佳、岡山寧子、眞鍋えみ子

京都府立医科大学医学部看護学科、京都府立医科大学附属病院

【目的】A 大学では看護実践能力向上を目的とした授業の一環として、4 年生を対象に臨床看護師と教員による看護技術演習・シミュレーション学習を行った。これらの演習における受講生の評価を明らかにし、卒業前の学生が求める演習のあり方を考察する。

<BR>【方法】授業を選択した 4 年生 22 名を対象に、自己記入式質問紙を看護技術演習、シミュレーション学習終了後に配布した。調査内容は、内容の有効性、今後の有益性などを「大変よい」～「悪い」の 5 段階で問い、演習全体の意見を自由記述で求めた。分析は演習の有効性、有益性等は基本統計量を算出し、自由記述は内容の類似性に従いカテゴリー化した。倫理的配慮は、研究概要と研究参加は自由意志であり成績には影響を与えない等説明し同意を得た。授業内容は<U>1 オリエンテーション</U>:「看護に必要な力とは」を KJ 法にて整理、発表した後、看護技術演習計画書をグループで作成、<U>2 看護技術演習</U>:呼吸、循環、消化器のシミュレータを用いたフィジカルアセスメント、3 事例の技術演習をグループ毎に実施、<U>3 シミュレーション学習</U>:狭心症発作時の対処の演習であった。技術演習、シミュレーション学習では臨床看護師がロールモデルを示し、学生の演習に対する指導も行った。<BR>【結果】22 名中 20 名から回答が得られ、性別は男性 1 名、女性 18 名、無回答 1 名であった。技術演習、シミュレーション学習の内容は「大変良い」60%「良い」40%、プログラムの有効性「大変良い」90%「良い」10%、今後の有益性「大変参考になる」85%「参考になる」10%無回答 5%であった。自由記述の内容 49 文を分類したところ、<学びの内容><教育方法-良い点><教育方法-要望>のカテゴリーが明らかになった。<学びの内容>では[急変時の対応ができる等 8 サブカテゴリー、<教育方法-良い点>では[臨地に即した内容でイメージしやすい]等 11 サブカテゴリー、<教育方法-要望>では[シミュレータに触れる時間を増やしてほしい]等 4 サブカテゴリーが抽出された。

<BR>【考察】今回の演習は、演習計画書を作成し認知レベルでの「看護に必要な力」を確認後、臨床看護師の実践見学、学生の実践を指導者らが指導するという段階を経て、行動レベルでの「看護に必要な力」習得をめざした。学生の多くは授業から多くの学びがあったと記述していたことから、効果的な演習であったと考える。全員が全ての課題を演習できるようにするなど学生の要望を取り入れた授業の検討が課題である。本報告は、文部科学省平成 21 年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。